

荒俣宏

龍動篇

帝都物語 詠唱 4

KADOKAWA NOVELS

帝都の完全破壊を企む魔人^{たくら}の前に
出現した妖美な守護聖女! 衝撃の
書下しサイキックノベル第4弾!

角川書店



カドカワパルズ

昭和六十一年二月二十五日初版発行

著者 荒俣宏 あらまたひろし

発行者 角川春樹

ていものごと
帝都物語 4 龍動篇 りゅうどうへん

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番 振替東京三一九五二〇八
〒100 電話 営業〇三三八八五二 編集〇三三八八五二

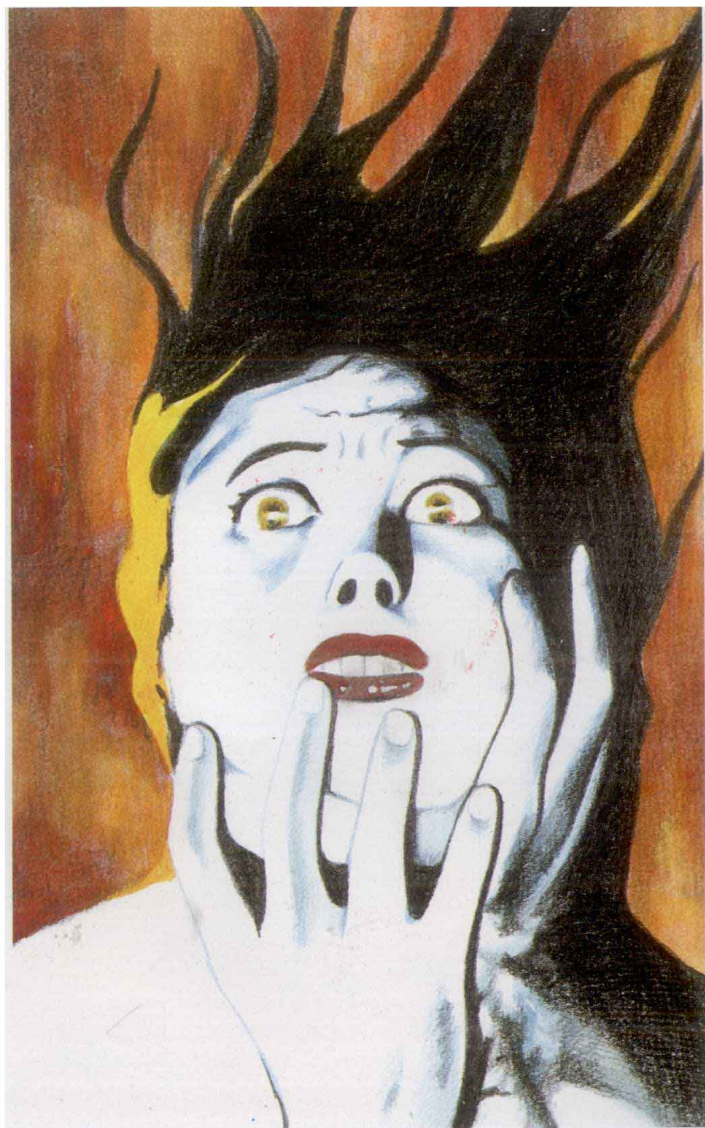
Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-777804-4 C0293









KADOKAWA NOVELS

帝都物語4

龍動篇

荒俣 宏

カバー絵・口絵・本文イラスト／丸尾末広

目次

卷一 夜の不可思議

13

卷二 新たな幻覚

27

卷三 地脈を断つ

41

卷四 秘術の再現

81

卷五 フラウンホーファー線の曇り

118

卷六 永遠の満月の方程式

182

卷七 地中の死闘

224

卷八 怨霊おんりょうたちの伝説

251

卷九 別れてゆく人々

282

明治四十年春、秘密裡に、帝都・東京を邪霊や呪術から守護するための〈靈的改造計画〉を立案する一つの機関が組織された。当時、平安の昔から吉凶を占い貴族政治の補佐役をつとめつづけた陰陽道の宗家土御門は、西洋科学のために次々に魔術の權威を破られ、衰退のきわみにあつた。そこで土御門家は、この秘密會議に加わり、東京の要所に神仏を勧請して靈の守りを固める仕事に、魔術復活の希望を託そうとした。しかし、その野望の前に立ちふさがつたのが、江戸の地靈平将門と、その地靈を操り帝都破壊を画策する青年将校加藤保憲であつた。加藤は、ふとしたきっかけで知りあつた大蔵省官吏辰宮洋一郎の妹、由佳理に、ふしぎな靈能が備わっていることを発見し、彼女を誘拐した。そして怨靈平将門を由佳理にのり移らせ、その邪惡な靈力を東京破壊に利用しようとしたが、明治の大文筆家幸田成行（露伴）や物理学者寺田寅彦にはばまれた。だが、大地の靈脈（竜）を駆り立て、ついに東京に大地震を引き起こすことに成功した。

しかし、辰宮兄妹をはじめ幸田成行も寺田寅彦も生き残り、

すぐさま帝都復興に立ちあがつた。

一方、加藤に誘拐されたあげく、父なし子を産むことになつた由佳理は、精神をむしばまれていった。彼女にとって心の支えは、娘の雪子だったが、実はその娘こそ、加藤が再度将門の怨靈を喚びだすために魔力で孕ませた運命の子なのだつた。

大震災による帝都破壊が、完全ではなかつたことを知つた加藤は、富山の葉売りに姿をやつして雪子に接近し、彼女を護つていた七福神の人形石を奪い、母のときと同じように誘拐に成功した。だが、地靈将門はまたしても動こうとはせず、逆に、安眠を破る者としてはつきりと加藤を敵視しはじめた。魔術師加藤保憲はこれに対抗するため、式神と呼ばれる目に見えぬ鬼を地中に放つて、地竜の頭を切断する地下鉄道工事を妨害させる一方、天から護法童子という新たな使い魔を招き寄せ、天の竜までも駆り立てようとするのだが……。

〈登場人物〉

平将門 たいらのまさかど

平安期関東最大の英雄。中央政權に刃向かい、関東を独立国化したため討伐されたが、その一生は関東ユートピア設立のためにささげられた。現在もなお大手町のビルの一角に残る将門首塚は、すでに千年間、東京の中心を鎮護しつづけている。

寺田寅彦 てらだ とらひこ

日本を代表する超博物学者、夏目漱石の一番弟子。江戸末期にふとした事件から実弟を手にかけて死なせた父のやるせない思いを無意識に受けつづ一方、物理学者でありながら超自然や怪異への限らない興味をいだきつづけた。迫りくる東京滅亡を必死で喰いとめようとする少壮の学士。

幸田露伴 こうだろはん

本名は幸田成行 しげゆき。明治期最大の東洋神秘学研究家の一人。その著『魔法修行者』『頭脳論』などの奇作と並び、因縁めいた評伝『平将門』など

は、『帝都物語』の読者には必携必読であろう。『八犬伝』の熱烈な支持者でもあった。また彼には『一国の首都』と題した長大な東京改造論があり、後年には寺田寅彦と親交を結び、渋沢栄一の伝記をも著している。

鳴滝純一 なるたきじゅんいち

理学士。辰宮洋一郎の旧友で、怪事に巻き込まれた辰宮由佳理を助けようとするが、妹の変事に無関心な兄、洋一郎と対立する。

辰宮洋一郎 たつみやよういちろう

大蔵省の若き官吏。帝都改造計画に加わり、明治末期から大正にかけての歴史の奔流を目撃する。復興院事務官。

辰宮恵子 たつみやけいこ

洋一郎の妻。旧姓、目方。旧中村藩相馬の地に社を護り、平将門を祖に祭る佛神社の宮司の娘。ある日占夢により、帝都の守護聖女として洋一郎のもとへ嫁ぐ。

辰宮由佳里 たつみやゆかり

洋一郎の妹。強度のヒステリー症状ないしは一種の霊能を有し、そのために奇怪な事件に巻き込まれる。精神を病んで森田正馬医師の治療

をうけるが、帝都に撒かれた怨念と復讐の種子は、彼女を通じて不気味に開花する。

辰宮雪子 辰宮由佳里の娘。魔人、加藤保憲の的になる。

加藤保憲 陸軍少尉、のち中尉。帝都に怨霊を喚び、古来最も恐れられた呪殺の秘法「蠱術」を使う。陰陽道、奇門遁甲に通じ、目に見えぬ鬼神「式神」をあやつる。辰宮由佳理を操る真の目的は何か。帝都の命運はこの怪人物の掌中に握られている。

黒田茂丸 報徳社の一員。尊徳仕法という経済論を示し、二宮尊徳を祖とあおぐ結社の中で地相占術を心得、竜脈を探る力を持っている。風水師と呼ばれる。

西村真琴 人造人間の発明、研究家。地下鉄工事にロボットの使用を唱える。学天則という東洋哲理を信奉する奇人。

泉鏡花 明治、大正、昭和の三代にまたがり唯美的文学世界を形成し、異才と謳われた。神楽坂七

不思議の一人として辰宮恵子の力杖となる。

卷一 夜の不可思議

1 皇族^{きやうぞく} 太陰^{たいいん}を飛びたつこと

夕焼けは久しぶりだった。

帝都に赤い翳^{かげ}りが降りたち、まだ真新しいビルヂングの列を紫色に染めた。

大震災から四年。帝都は急速な復興を遂げ、地上に白亜の建物が林立した。すべての建築物が耐震構造を義務づけられ、高さも制限された。再建されることになった国会議事堂、あのギリシアの殿堂を思わせるすばらしい建築物は、震災後の東京で最も高いビルヂングになるはずだった。

だから、それ以外の建物は国会議事堂の高さを超^こえることはできなかった。階数でいえば、地上七階。これは新東京に建つ高層建築の目安となった。

夕暮れは、白く新しいビルヂングの群れを紫に染め、さらに暗青色の翳りの中に隠しこんだ。

こうして闇^{やみ}が訪れると、帝都の街路という街路に美しいイルミネーションが輝いた。銀座^{ぎんざ}の並木

が、初夏の夜空に黒く、くつきりと浮かびあがった。

しかし、この新しいイルミネーションは、帝都から夜空というものを追放したのだった。目にまぶしい黄色い輝きが、かつての提灯行列の華やかさに似て、常時この街路をいろどるようになった。そのために、暗黒の夜空、星降る空は、もはや、色あせた明け方の単調な眺めも同然であった。そんな色うすれた夜空を、もうだれも見上げようとはしなかった——

だが、帝都の夜も八時をまわると、さんざめく巷に徘徊する人々がそれとは気づかぬうちに、空は暗黒の頂点に達した。

対の角をいただいた三日月が、まがまがしい光を、玉露のようににしたたらす頃となった。

三日月の一角を、ふいにさえぎる影があった！

はじめは、黒いもやのような曇りに見えた。しかしそのもやは、またたく間に大きくひろがった。ハタハタと夜気を振動させる羽ばたきが、銀座や宮城の柳の葉をふるわせた。

やがて、黒いもやが、たくさんの黒点の集合に変わった。それはまるで、太陰——すなわち月の黒点のように見えた。

月の黒点！

その黒点は、しかし、生きていた。生きて、羽ばたいていた。黒く、長い翼が見分けられた。驚くのように巨大な鳥の群れが、帝都のイルミネーションにまぎれて、月面から飛びたち、地球へ降下

を開始したかのように――

黒い鳥たちは、不吉な振動のほかには物音ひとつたてず、一気に地上へ降下しつつあった。

焼けた石炭のような赤い目が、点々と現われた。巨大な嘴、そして翼！月に隠されていた太古の恐るべき予言を、地上へ運ぼうとでもいうのか。この梟族は一条乱れぬ列をつくって、矢のように地表へ突進した。

闇からの遣いか？それとも運命の予兆か？黒い鳥たちは次々に帝都のイルミネーションの中に突入し、そのまばゆい輝きに溶け入った。

「不吉な」

と、つぶやいた男が、帝都にたった一人、いた。地相占術家、黒田茂丸であった。

その夜、彼は麴町の坂の上から、月を見上げていた。そして、雫のように月面を飛びたった奇怪な鳥の群れを目撃した。

黒田は翼の影を目で追った。数かぎりない翼が、申しあわせたように整然と秩序だった動きを見せて、帝都の輝きの中に舞い降りようとしていた。

おそらく、このささやかな異変に気づいたのは、東京広しといえども、黒田茂丸ただひとりにちがいがなかった。だいいち、イルミネーションに掻き消された夜空へなど、目を向けても仕方がなかったのだ。